

書評

群れとカテゴリー

——河合香吏編『集団——人類社会の進化』書評——

京都大学学術出版会、2009年、364p.

石田 智 恵*

この飾り気のない、よって逃げのない表題は決して大袈裟ではない。3つの領域から17人の執筆者が参加した論集である本書の主題はまさに、人類およびその他の霊長類の集団という現象そのものである。加えていうなら、ヒト研究とサル研究のなかから集団を扱う論文を集めることで、本書は「ヒトとヒト以外の霊長類が共有したり、しなかったりする」(p.xiv、序章) 進化の過程で獲得されたとみられる特質を明らかにしようとする。つまりサルを視野に収めることで初めて捉えられるヒトの集団性、社会性の解明を最終的な目標としているのだ。

霊長類学と人類学(生態人類学、社会文化人類学)という区分をそのまま構成に反映させるのではなく、4部構成で各部にテーマが設けられ、これに沿って専門分野にとらわれず各論が振り分けられている。内容をごく単純化すれば、ヒトを含む霊長類の集団を主題とするための理論的な土台の提示(第1部「社会性の進化」、1~4章)に始まり、調査に基づく事例研究(集団を形成・維持する行動を主に論じる第2部「社会集団のなりたち」、5~7章、集団の認識のありようを主に扱う第3部「われわれ意識の生成と展開」、8~10章)を経て、ヒトの社会性に特化した理論的な展開(第4部「新たな集団論へ」、11~13章)に到る、という流れになっている。そして、母体となる共同研究の紹介および本書の簡潔な導入をなす序章と、全体の総括、専門領域ごとのまとめと今後の展望を提示した終章がこれらを挟み込むことで、問題関心の共有と課題の役割分担のバランスを保った一つの作品に仕上がっている。全体的な本書の関心はサル(ヒト以外の霊長類)よりもヒトのほうに重心があるが、随所で使用される「進化的基盤」という語の選択は、執筆者に関心が共有されていることの証左である。ほぼすべての章に内容の関連する他の章への言及があり、章のあいだの異同やつながりが確認しやすい点も論集としての完成度の高さを見せ、共同研究であることの効果を最大に引き出した著作といえよう。参考までに分野ごとの執筆者とその分担を記しておく、霊長類学からは足立薫(1章)・伊藤詞子(Article 1)・中川尚史(4章)・黒田末寿(11章)、生態人類学からは北村光二(3章)・河合香吏(7章)・寺嶋秀明(8章)・曾我亨(9章)・杉山祐子(10章)・梅崎昌裕(Article 2)、社会文化人類学からは内堀基光(2章)・大村敬一(5章)・床呂郁哉(6章)・田中雅一(12章)・船曳建夫(13章)・椎野若菜(Article 3)となる(敬称略)。

本書のなかでも霊長類学に明るくない評者の視点から特筆したいのは、編者のことばを借りれば「ひとりひとりの顔が見えなくなる以前の、あくまでも代替不可能な個体の集まりという具体相から出発ないし再出発しようとする」(p.iv) 姿勢、具体性への堅固なこだわりである。この姿勢は、「サルとヒトの接点、霊長類社会と人類社会の連続性と不連続性」(p.iii) を協働して模索することから離れ、「サル屋」と「ヒト屋」がお互いに背を向けるかのように各々の専門性を強めるほうに重点を置く昨今の傾向への挑戦であり、同時に、特に序章と終章の一部に明示された、進化のレベルでの歴史を顧みず任意の人間集団を前提とするような「すぐれて現代的なパースペクティブ」(p.ii) に立つ近年の「コミュニティ論」への挑戦でもある。そして主題に対するこうした真摯な構えが、本書の各論において、集団の形成と維持にかかわる個別の行為、環境、出来事を注意深く追う試み(5、7、8章など)のみならず、一見すると集団とはいえないような状態や、集団が解体する、または成立するに至らないようなモメントにも綿密

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2007年度入学 共生領域、日本学術振興会特別研究員(DC1)

な観察と思考が及んでいること（2、8、13章など）に強く反映されている。後者のような観点が導入されることは、忍耐を要する観察を通して個体の生きた動きを捕捉しようとする霊長類学者が共同研究の一翼を担っていることと無関係ではないだろう。

序章には集団の8つのレベルが整理されている（pp.xi-xiii）。このうち1から5までのヒトを含めた霊長類のすべてにみられる集団の形態である「可視的」あるいは同所的な集団のレベルと、6から8のヒトの社会にのみ現れる「不可視」の集団、表象（想像）の集団のレベルの違いとその関係は本書の要点の一つである。便宜的にここでは前者を「群れ」、後者を「集団カテゴリー」と呼ぶことにするが、この区分は、2章では「自然的小規模集団」と「擬制集団」（または「表象の集団」）、8章では「今ここの集団」と「はらかな集団」、9章では「社会集団」と「文化範疇」、10章では「参照する位相」の複層性として明確にされている区分に対応し、集団の具体性と抽象性、その現れ方がさまざまに論じられる。7章での「レイディング集団」と「民族集団」の対比も、より事例に沿ったかたちでこれに相当するものである。

とはいえ、すべての章が編者の言う「同所的」な集団、「実体的で実態的な」目に見える「群れ」的集団を等しく主題化しているわけではなく、執筆者によってこの集団の階層性への距離の取り方に小さくない差がある。これを参照点とすると、各論は同所的な「群れ」のありようの考察に集中するもの、「群れ」から「集団カテゴリー」への連続性と断絶を視野に収めるもの、「群れ」を直接に扱わないもの、といった分け方もできよう。すなわち、本書が提示する理論→事例→理論という全体の構成に沿った読み方がある一方で、集団現象のどのようなレベルを焦点化するかという視点の違いから各論を比べることもできる。このように異なる論文がひとつの本に収められ、広い読み幅を読者に提供している。

第1章の末尾で足立が述べているように、「自分たちは何者か」という問いはヒトのみが発するものであり、ゆえにヒトについてのみ論じられるが、その問いが期待する答えはしばしば集団の名前である。第3章で北村が論じている通り、集団をめぐるサルからヒトへの移行において決定的なのは、ある個体が集団のメンバーであるか否かについて、「自分の仲間かそれ以外か」という判断に関わらない第三者の立場からの認識が行なわれるようになること、換言すれば、個体の分類（他者分類）が第三者に伝達し得る情報、「分離した表象」（p.54）になることである（また北村は、最もヒトに近い類人猿であるチンパンジー属がちょうどこの中間と言える他者認識の方法を見せることにも言及している）。これは単に言語能力の獲得により名前を使った集団の表象が可能になったということのみならず、表象される集団は同所性を必要としない、「群れている」必要がないということでもある。その意味でも「分離した」という句は意味深い。集団間関係もしくはカテゴリーを扱うことは第三者の視点を必然的に求めることであるが、第三者の目を排し、群れをなす個体のレベルに踏みとどまる論考群からは、集団のなりたちを論じる上でその集団に名前をあてがう必要はないということがわかる。霊長類学の論文は必然的にすべてこのタイプに含まれるが、同じく同所性から離れることなく人類学の議論として集団を論じている大村（5章）も、対象集団の名前を使用していない。

第3部にあたる8・9・10章はいずれも群れから集団カテゴリーへの階層性を強く意識したものである。その視点からこれらは、群れとカテゴリーの断絶が個別の人間社会においていかに連続し得ているか、言い換えれば、ヒトが群れとカテゴリーをいかに使い分けているか、どのような状況が使い分けを要請するかということ、各々の対象とする人びとの事例から明らかにしたものである。とりわけ9章で曾我は、「まとまり」（群れ）はそれ自体に先立つ行為によって存在するのに対し、「文化範疇」（集団カテゴリーまたは集団の名前）は行為に先だって存在するという明快な指摘を行なっている。

上記の指摘をふまえれば、群れのレベルを直接に扱わないいくつかの論文は、集団カテゴリーが表象を介して行為の共同性を事後的に喚起する仕方の事例を提示するものといえる。しかし多くの場合、ヒトは集団カテゴリーのレベルだけでなく群れの同所的集団にも名前をつけるものであり、群れと集団カテゴリーが常に全く別のものであるとはいえない。そして人間は日常的にこの2つのレベルを区別しない。そのため、議論にあたってあらかじめ集団の名前が用意され、議論がその使用できる集団の名前を使うことに依存する間は、群れの特性と集団カテゴリーの特性、そしてその両者の論理的関係を十分に捉えることは困難であろう。だとすれば、このタイプの論考は群れの具体相を考察した他の論考と併せて初めて集団の「進化的基盤」の探究たり得ると言わねばならない。

第2章で内堀は、同所性、可視性を備えていない集団カテゴリーは群れのな集団を基礎とした表象によって可視化されると論じる。そのような表象は、個体レベルでの外見や行為に現れる共通性を装う。だが、動物の群れが維持されるには「群れている」こと以上の共通性を必要としない場合もあるということ、1章で足立が「混群」の観察から論じている。ここには、群れそのものと、カテゴリーが装う群れとの差異が顔を覗かせている。多くの、特に近年の人類学的研究で集団が主題に上がるとき、問題になっているのが個人間関係であってもそれが集団間関係に還元されたり、その逆がみられるのは、群れとカテゴリーが別物であり得る位相を想定しないがゆえではないだろうか。

近現代に特有の市民社会と国民国家制度に埋め込まれた「象徴能力と想像力」を介して生成するヒトの不可視の集団を対象とし、その認知・運用・影響を人間個体の具体相のなかに見ようとする者は、一見すると関心が遠いと思われる「霊長類の群れ」を基軸とする本書の寄与を過小評価すべきでない。現象としては断絶のあるこの2つの集団のレベルについて、いかにヒトは連続したものとして関わり得るのか。霊長類やその他の動物種にまで広がる共通の基盤たる「群れ」という参照点は、このような問いに別の角度から光を当てるものとなるだろう。

